

第8回日本栄養・嚥下理学療法研究会学術大会

運動機能科学領域 今岡 真和

2023年3月5日に岡山県倉敷市にある川崎医療福祉大学にて、第8回日本栄養・嚥下理学療法研究会学術大会が開催されました。同学会は理学療法士による栄養・嚥下領域の学術的発展を目的に「高齢者やリハビリテーション対象者が、低栄養や脱水、誤嚥性肺炎などのリスクを回避し、効率の良いリハビリテーションサービスを受けるための知識と実践方法を理学療法領域において醸成していくことが使命です。そのため、リハビリテーション栄養に関する最新の知見や徐々に構築されてきている嚥下理学療法についてのエビデンスの確立とその普及、啓発に努めていく。」として、活動している学術団体です。主な領域としては、①高齢者の栄養管理（低栄養・サルコペニア）、②運動と栄養（筋力強化・体力増強・廃用）、③特殊な状態における栄養管理（周術期・がん・糖尿病・炎症状態）、④脳卒中者の摂食嚥下障害、⑤神経筋疾患の摂食嚥下障害、⑥小児分野の摂食嚥下障害に分けられており熱心な学術活動がなされています。特徴的な点として、理学療法士以外の管理栄養士、看護師、歯科医師が学術発表していることが挙げられます。理学療法分野の学術大会では、発表者のほとんどが理学療法士で構成されていますが、栄養・嚥下分野においては理学療法士と同じような問題意識や同じようなアプローチを試みている他部門、他職種が多く存在しており、職種間連携の鑑のような意見交換がなされました。まさに、口角泡を飛ばすような状況でしたがマスクは皆さん着用していました（令和5年3月5日時点）。

私は、「地域在住高齢者における口腔機能低下の関連要因について」という地域在住高齢者を対象に口腔機能低下

に関連する要因を横断的に調査しました。口腔機能の低下はサルコペニアの初期所見であり、身体的フレイルに先行して起こるとされ大変重要な視点とされています。そのため、理学療法分野で改善可能もしくは介入可能な関連要因を明らかにすることとして取り組みました。

対象は、地域在住高齢者249名、平均年齢74.2 ± 6.9歳としました。調査項目は四肢骨格筋量指数、握力、歩行速度、2ステップテスト、全般的認知機能検査、抑うつ（Geriatric depression scale 15 : GDS-15）、服薬数、血中アルブミン値、C-reactive protein (CRP 値) などとして「つげさんフレイル・ロコモ・認知症予防プロジェクト2022」のデータを活用しました。口腔機能低下は、基本チェックリスト内の口腔機能関連3項目のうち1項目以上に該当した者を口腔機能低下ありとして分類しました。

結果として、口腔機能低下の分類は健常群111名（44.6%）、口腔機能低下群138名（55.4%）でした。単変量解析で有意差を認めた項目と年齢、性で調整したロジスティック回帰分析のモデルから歩行速度オッズ比0.2（95%信頼区間0.03-0.8）、GDS-15オッズ比1.2（95%信頼区間1.1-1.4）、血中アルブミン値オッズ比0.3（95%信頼区間0.1-0.9）となり独立関連因子であることを報告しました。

会場からは「口腔機能低下の分類や、オーラルフレイルの定義のコンセンサスが得られていない昨今の状況から、他の分類や定義を用いた場合の分析を試みたか？」などの議論が中心となり、今後複合的な視点からオーラルフレイル研究を継続実施する必要性について再確認する良い機会となりました。

